

特集 英語が苦手な生徒への支援

英語授業を支える学級集団づくり —言葉で人間関係を育てる—

榎葉みつ子

(広島大学)

1. 学級集団と生徒の学習意欲

年度当初は同じような成績であったのに、次第に学級間で成績に大きな開きが出てくることがある。よく調べてみると、成績が上昇している学級では、より多くの生徒が、彼らの能力を十分に発揮している。それに対し、成績が低下している学級では、授業が不活発で、十分に能力を発揮できない生徒が増えている。

河村(2010)は、学級集団がこれほどまでに生徒の学習意欲、ひいては学力に影響することを、日本の学級集団のもつ「共同体」としての特性を挙げて説明している。年間を通じて同じ仲間と多くの活動を共にする学級集団は、生徒同士の依存度が強く、暗黙のうちにルールを共有するようになる。そのため、属する学級の傾向や人間関係が、生徒の考え方や行動を左右する。「共同体」としての特性をもつ学級では、学級集団作りと学習指導とを切り離すことはできない。

コミュニケーション能力を育成するために、英語教師は、生徒が自分のこと、感想、意見等を表現しやすい集団を作らなくてはならない。また、たくさん間違いをしながら学んでいけるように、間違いを許容し、お互いを尊重する雰囲気を作らなくてはならない。英語の授業中に生徒同士がどのように英語を練習したり、用いたりするか、また、それを教師がどう指導するかが非常に重要になる。なぜなら、「言葉」は人間関係に最も強い影響を与えるものだからである。

2. 英語授業での学級集団づくり

のびのびと自分のことを表現できるような学級を

作るために、集団を組織する段階と、維持・発展させる段階とに分けて、留意すべき点を示す。

(1) 人間関係とルールの確立のために

①どの生徒にも明るくオープンに接する

授業の大前提は教師への信頼である。明るくて誰にも優しい教師と一緒にいて楽しく、生徒に安心感を与える。逆に、気分屋で怒りっぽい教師(そんな教師がいたらの話であるが)の授業では、生徒が緊張し萎縮するであろう。英語の教師は、生徒が心と口とを開きやすいように、努めてリラックスした受容的な態度を取るようし、安定した学級の雰囲気を演出しなくてはならない。

②生徒の言葉を丁寧に聞く

ひとりひとりの生徒とその学習を大切にしたいと思うなら、まず、言葉を聞かなくてはならない。人は聞いてくれるから話すのであって、聞かない相手には、いくら強制されても話したくはない。言葉を学ぶ雰囲気の基盤は、教師がいい聞き手となることである。

また、丁寧に聞くこと理由は、英語であれ日本語であれ、生徒が発する言葉にはいろいろな意味や価値があるからである。英語で生徒の日常や気持ちが表現されていけば、喜んで内容に耳を傾けたいはずである。発話に間違いがあれば、指導に生かす絶好の機会でもある。日本語で思わず生徒が発するつぶやきには、生徒の感嘆や困惑が表現されており、学習を促進するためのヒントが含まれている。

筆者もそうだが、教師はついしゃべりすぎてしまう。「それで?」と促すつもりで、少し黙っているくらいで丁度いいかもしれない。

③生徒の発言を学級の全員に丁寧に聞かせる

教師が生徒の発言を聞くだけでなく、生徒同士にも同じように、相手の発言に耳を傾けるようにさせる。誰かの発言に際しては、「Listen, please!」と全体に促して静かに聞ける状態を作ったり、小さな声の生徒には、「I'm sorry, but will you speak up, please?」と依頼して言い直してもらったりする。だれかの発言を一度で聞いて、生徒同士が自分たちの声でつながることが、聞き手を育てる。いちいち教師が言い直していると、生徒の言葉の値打ちが下がり、生徒はいい加減な聞き方しかなくなる。

④生徒ひとりひとりの活動相手を作る

「誰とでも協力する学級」が理想である。しかし、日頃の交友関係や学力差によって、仲間に入れない生徒がいる場合もある。そんな生徒がひとりでもいるのであれば、ペアやグループワークが成り立つように、必要な調整をしなくてはならない。グルーピングや座席などに配慮することは、授業準備として当然のことである。すでにある人間関係を利用して生徒全員の居場所を確保することから、学級全体の人間関係を育てることにつなげたい。

⑤英語の学び方をきちんと伝える

どのように英語の授業に取り組んでほしいのかを、あらかじめ生徒にきちんと伝える。例えば、

- ・たくさん英語を使って、間違いから学ぶ
- ・たくさん友達と関わることで学ぶ、等。

その際に、納得のいくような説明や実例の紹介をすることが大事である。例えば、多くの間違いから英語を身につけたという有名人の体験談などである。「～しなさい」と言うだけの命令口調の指示には、生徒が一旦は従うことがあっても行動様式として定着しにくい。後に、教師が大声を出して統制しようとするほど、反発を招くようになってくる。理由に納得できれば、生徒は抵抗なく指示に従うであろうし、効果が実感できるに従って、生徒は進んでその規範を取り入れていくことであろう。

(2) ルールを浸透させ、人間関係を育むために

①生徒同士が関わる機会を多く作る

言葉を交わし、時間を共に過ごし、共有する課題を協力して果たすことで、人間関係は深まる。授業中は、生徒が英語の学習をするだけでなく、同時に人間関係を深め、仲間を作っていけるよう、生徒同士で関わり合う練習や活動を積極的に取り入れたい。

②生徒が納得する叱り方やほめ方をする

望ましい規範を浸透させるためには、根気強い指導が大切である。間違いを揶揄したり、人格を傷つけたりするような言動が注意を受けずにやり過ごされることは、他の生徒のやる気をそぎ、教師が守ってくれないと思わせることになる。授業中、生徒の言動をよく観察し、承認したり矯正したりすることは重要な指導である。

具体的には、叱る際は、行為を注意するけれど人格を否定しない、あっさりと言う等、生徒に受け入れられるように配慮し、その場で対処する。生徒を育てるために、ほめることはもっと大事である。一生懸命に英語を使おうとしているときなど、微笑む、うなずく、言葉で褒める、学級全体に紹介する等、場面にもっともふさわしい方法を選ぶ。周囲からの承認とそれによって得た自信とを糧に、生徒を自立させることも教師の責任の一部である。

3. 学級集団の自立

ルールが浸透し人間関係が育ってくると、生徒が自主的・主体的に動き出す。生徒が個性を発揮し合い認め合うような言語活動によって、そんな成熟した学級集団を育てたいものである。そして、それは、支援の必要な生徒のために工夫や配慮がなされた、わかりやすい授業において実現される。ここでは、健全で温かい授業中の雰囲気づくりに必要なことのみ述べてもらったが、この特集の他の章を参考に、学習指導のより一層の充実と共に取り組んでいただきたい。

【引用文献】

河村茂雄(2010)。「日本の学級集団と学級経営—集団の教育力を生かす学校システムの原理と展望」図書文化。